

65 明治13年4月26日森鍛冶屋

疇夕者少し所用も有之散歩彼ノ先祖重代ノ金ノヒデワナイ陰
門驗察機を振り廻スト云斂「デワナカツタ」天下第一ノ名医某
大先生訪ント思ヒ学室ノ戸を破レン計リニガタミミツトンピシ
ヤント敲キシニ室内ニ声アリカムイント云ニ付戸ヲ推開キ室内
ニ入ルニ丈短ク体丸リ頬ニ髭を逆ニ撫ル人有コレナン彼ノ酒を
見スレバ忽チ涎ヲ流シ若コレヲ吞マセル時ワドロンケンズプロ
リ先生ト変名シ玉門関ノ下を問エバ口ニ委ンテ吐キ出シ道楽寺
ノ和尚モ豆蔵も舌ヲ振テ恐レルト云梅仙先生ナリキ主客各席ニ
ツキ夫より種々雑多ノ話を始メタリ其話ノ次第ハ先始ニワ時季
寒暖之事ヲ云中ワ散シテ四方八方世上ノ雑話トナリ末マタ合シ
テ彼玉門関之事ニ至ルコレヲ放テバ則衆人ヲシテ涎ヲ流シ腮ヲ
抜キ腸をヨジラシムコレヲ卷ケバ退テ陰門ニカクル其味極リナ
シ皆ホントダヨ善聞者玩索シテ得ルコアラバ則終身笑て直ス能
ワザル者アラント思也夫より問答益盛ニナリ且談シ且笑て興已
ニ闌ナラントスル時彼ノ先生從容頭ヲ撫デ上ケ髭ヲ撫下ケ完爾

トシテ曰我が皇国ニ帰ル_レ近ニ有リ依テ曩日企ル如ク本月拾九
 則土曜日ノ晚景ニ波斯頓台ニ来会シ離別ノ酒を酌マント欲然リ
 ト雖事閑静ニシテ愉快を極ムルヲ以テス故ニ人員少ナルヲ以テ
 善トス汝ガ意如何若同意セバ此事を菊地氏_(キキ)ニも報知セヨト僕悠
 ヲ然トシテ対テ日善哉問也今僕一ト度君ニ離別セバ再度君ガ髭
 ノ逆カ撫ヲ見梅カ軒ヲ聞も又近キニアラズ故ニ君ガ間暇之日ヲ
 トシ別杯ノ筵ヲ設ケ一ツワ以テ君ガ安全ニ帰朝スル_レヲ祈リ次
 ニは以テ君カ梅ガ軒ヲ聞ント欲スルワ固より僕カ希所ナリト云
 ニ先生曰然ラバ如約束会セント言終テ手ヲ握リ別を告テ帰ル于
 時夜已ニ三更ナリキ夫故ニ今朝ワ大ニ朝寝ヲヤラカシ八字ノ鐘
 枕ニ響テコウ々タルニ驚キ愕然トシテ飛起キ書ヲ作テ以テ大
 兄ニ告知ス只若シ同意学暇ヲ得バ天ノ晴雨ニ子ノ營地ノ凸凹ヲ
 歎ズ本日点灯前より所好ノ山海ノ珍味ヲ齎シ来会ヲ賜フベシ土
 屋梅軒「ラットドッコイ」静軒サンモ六字頃ニ鼠栗々々不落離
 ト来ル由書余万勝拝眉握手ノ時ニ有リ不宣

四月拾六_(キキ)

森鍛冶屋

呈

白拝

菊地学兄_(キキ)

桐下